

東邦大学学術リポジトリ

Toho University Academic Repository

タイトル	タイ・台湾・日本の三大学によるCOIL型国際交流の試み
別タイトル	A Trial of COIL type International Exchange by Three Universities in Thailand, Taiwan, and Japan
作成者（著者）	朝, 加奈
公開者	東邦大学
発行日	2023.02.28
ISSN	03877566
掲載情報	東邦大学教養紀要. 54. p.117 131.
資料種別	紀要論文
内容記述	論文
著者版フラグ	publisher
JaLCDOI	info:doi/10.14994/toho.liberal.arts.rev.54.117
メタデータのURL	https://mylibrary.toho-u.ac.jp/webopac/TD28213187

タイ・台湾・日本の三大学による COIL型国際交流の試み

吉 朝 加 奈*

A Trial of COIL-type International Exchange by
Three Universities in Thailand, Taiwan, and Japan

Kana YOSHIASA*

1. はじめに

2020年からの新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の世界的な感染拡大により、多くの大学で、学生の海外派遣は中止となり、現地または日本における海外学生との対面での国際交流事業も停止する状況となった。文部科学省（2022）によると、2020年度の日本人の海外留学生は2018年と比較して98.6%減少、日本での外国人留学生の受け入れも2021年度は2019年度と比較して22.4%減少した¹⁾。各大学はグローバル教育、国際交流の方法や戦略の見直しを迫られることとなった。

以前から、国内の複数の大学がICTツールやオンラインを活用した国際教育を実践してきた（全，Miyamoto，2019；藤掛，山岸，2019；池田，2015）²⁻⁴⁾。これまでの国際教育の主流は実渡航だったが、2020年以降のCOVID-19の影響下において、オンライン国際協働学習（Collaborative Online International Learning：以下COIL）やVirtual Exchangeの取り組みが急速に普及、発展している。文部科学省は、オンライン国際教育プラットフォーム（Japan Virtual Campus）を立ち上げ、オンラインによる国際教育・交流を促進しようとしている⁵⁾。

東邦大学も、以前は、学生の海外派遣や、国内で様々な国際教育・国際交流を主に対面で実施してきた。しかし、他大学と同様にCOVID-19の影響を受け、2020年度の海外派遣と国内での対面での国際交流は全て中止となった。COVID-19流行の収束の見通しが見えない中、学生たちへの国際教育・交流の機会を確保すべく、COILによる国際交流の可能性を探った。本稿は、その中で共通教育推進委員会のワーキンググループが2021年度に実施した、COIL型の国際交流プロジェクトの試みを報告すると共に、今後の国際交流の可能性を考察する。

1.1. COILとは

COILとは、ICTを用いてオンラインで他国の学生をつなぎ、何らかのプロジェクトに協働しながら取り組む手法である。2000年代にニューヨーク州立大学（State University of New York）の教員であったJohn Rubinが、経済的、時間的制約により実際の海外留学・渡航が難

*東邦大学看護学部外国語研究室

しい学生などを対象として始めた国際交流授業手法であり、インターネット技術の革新と共に発展してきた (Rubin, 2017)⁶⁾。日本では、2018年に文部科学省の世界展開力強化事業に採択された13大学が発起人大学としてJPN-COIL協議会が発足した。2022年10月現在、関西大学を中心に東邦大学も含む国内外の約60校が参加をし、COILによる教育実践の情報共有を実施している⁷⁾。

COILの形式は大きく3種類ある。「同期型 (Synchronous)」は、オンラインでの合同授業やディスカッション、成果発表など、リアルタイムでの活動を行うものである。「非同期型 (Asynchronous)」では、共同プロジェクトをSNSやクラウドを利用して行う。最後に、この同期型と非同期型を組み合わせた「ハイブリッド (Hybrid)」がある。例えば、録画された講義をあらかじめ視聴し、ディスカッションはオンラインでリアルタイムに行う。学習の目的な状況により、同期型、非同期型、ハイブリッド型のいずれかまたは組み合わせで実施されている⁸⁾。

2. COIL 企画立案の背景とねらい

2.1. 背景

前述のように、COVID-19の影響で学生が海外に行けない状況が続いていた。東邦大学でも、オンラインで出来る国際交流を行わないと、学生が海外との交流に魅力を感じることがなくなり、国際交流、グローバル化教育の取り組みが弱体化する可能性があるという危機感が強まった。当時の医学教育センター長であり東邦大学共通教育推進委員会の委員長が、様々な方法をリサーチし、COIL型の教育を導入していく必要性を提示した。委員会で協議の上、規定の一部改正を申請し、当該委員会の下部組織にオンライン国際交流プロジェクトのワーキンググループが作られた。当時の国際交流センター (現グローバル化推進センター) の協力も得、2021年度に全学部共通でCOIL型国際交流のパイロットプログラムを実施することとなった。

豊かな体験を通じて「多様性」を実感する機会を得ることが学生たちに必要であるということが、本パイロットプログラム提案の背景にあった。プログラムの最初の企画書 (2021年10月6日版) に、企画背景として次の記載がある。

「多様性」の学びには、外国語の語学力そのものの習得もあるが、文化によって異なるコミュニケーションの方法・リーダーシップの取り方、議論の進め方、意思決定法を知り、自分のコミュニケーションスタイルの立ち位置を知ること大切な学びとなってきた。異文化コミュニケーションの分野では、国、文化におけるコミュニケーションスタイルの差異の研究が進んでいる。このような現状を踏まえ、学生自身が異なる文化におけるコミュニケーションに直接触れ、多様性のあるコミュニケーションとリーダーシップの取り方を学んでいくことは、学生にとっても大切なスキルとなると考えられる。(企画書 2021年10月6日版)

以上のことに基づき、大学入学後、国際交流の機会を得ていない低学年を対象とした。学生たちの参加しやすさから英語力や時差などを考慮し、交流相手校の候補をアジア地域の大学とした。

2.2. プログラムの準備

オンライン国際交流プロジェクトのワーキンググループには、まず、共通教育推進委員会の委員である教職員数名が入り、国際交流センターや各学部の英語教員や国際交流の担当教員などが協力メンバーとして加わっていった。2022年夏に具体的なプログラム案を検討し、9月に国際交流の協定校へ協力を要請した。その中でタイ王国の Prince of Songkla University（以下、ソクラ王子大学）と台湾の Chung Shan Medical University（以下、中山医学大学）の二大学と共に、プログラムを実施することに決まった。各大学の担当者による最初の会議は10月である。使用言語は開催する三大学の学生たちにとって共通言語となる英語とし、対象は低学年とし、お互いの大学での学びや大学生活に関するテーマについて協働学習をする方向性を決定した。年度途中からのプログラム開発であったため、三大学の学生が参加できる日程の調整は難しく、最終的には2月から3月かけての2週間プログラムとした。11月にプログラムを決定し、12月に各大学において学生を募集した。参加学生が決定したのは翌1月だった。

2021年度はパイロットプログラムとして実施するため、ワーキンググループとしては教育目標ではなく方略の検証に重点を置き、次の目的を設定した。オンラインによる国際交流の場を提供する、海外の学生と共同して作業し発表する場を提供する、COIL型教育の実践例を提示する。そして、学生が取り組む課題等についての検証結果を示すことで、学内におけるカリキュラム編成や教育実践の質の向上に寄与することを目指した。

3. プログラムの概要

3.1. 授業の設計

プロジェクトのテーマは「University education : from the experience of the COVID-19 pandemic」とし、コロナ禍後の私たちの大学生活はどうなるのか、社会は大学で教育を受けた者たちに何を求めているのかをプロジェクトトピックとしてとりあげることにした。COVID-19の世界的な大流行の最中に大学生となった参加者たちが、大学での学びの意義を考察すると同時に、お互いの国の社会や大学教育のありようを知ることを目的とした。

今回のプロジェクトに参画した大学での第一学習言語は、それぞれの国語であるため、使用言語は三大学の共通言語である英語とした。ただし、語学研修ではないため、参加条件に英語のレベルは含まなかった。

3.2. 参加学生

各大学から10名ずつで、三大学合計30名を定員とした。東邦大学には5学部あるため、各学部2名を定員とし、2021年12月23日に全学部の1年生全員に案内メールを出し、同内容のポスターを学内に掲示した（補足資料1）。プログラム中の使用言語は英語だったが、本プロジェクトは語学研修ではなく、他国の学生と交流することが目的であるため、東邦大学での募集の際に英語力の基準を設定しなかった。今まで海外の学生と接したことのない学生たちも応募しやすいように、英語力に自信がなくても様々な支援ツールを活用すれば問題ないことも伝えた。

東邦大学からは1年生8名（医学部3名、理学部2名、看護学部2名、健康科学部1名）が参加した。薬学部は学部スケジュールの関係で、参加者はいなかった。中山医学大学からは10名（医学部3名、医学技術学部3名、医学人文社会学部2名、健康管理部2名）、ソクラ王子大学から6名（医学技術1名、生命工学2名、生物学1名、物理学1名、数学1名）から構成される、三大学合計24名の学生の参加となった。

3.3. スケジュール

プログラムの全ての行程はオンライン上で行われ、リアルタイムで交流する同期型セッションと、ITC ツールや SNS 等を使用し交流する非同期型セッションの組み合わせで実施された。全員参加の同期型セッションを2日間設け、その間の2週間を非同期期間とした。非同期期間の学生たちの活動を支援するため、中間に、任意参加の同期型のセッションも1回実施した。

三大学の学生が、4～5名の混成チームに分かれ、共通のテーマについてオンラインで活動をした。スケジュールは図1の通りである。同期型セッションの第一回目を2022年2月24日に実施し、オリエンテーションなどを実施した。その後、2週間の非同期型の期間（2月25日～3月10日）に、学生が主体となってグループごとに発表に向けて資料収集や意見交換を行うようにした。途中の3月1日に、活動のサポートとしてオプショナルの同期型の時間（任意参加）を設けた。3月11日に、同期型セッションの第三回を実施し、グループごとに発表を行うこととした。同期型実施の時間は、全員参加の第一回と第三回が日本時間16～18時（台湾時間15～17時、タイ時間14～16時）、任意参加の第二回が日本時間16～17時（台湾時間15～16時、タイ時間14～15時）とした。

3.4. 使用した ICT ツール

プロジェクト参加者用のコラボレーション・プラットフォームとして、Microsoft Teams を採用した。プロジェクト参加者は、大学のメールアドレスでMicrosoft Teamsにサインインし、その中でプロジェクト参加者全員が所属するチーム（COIL PROJECT 2022）と、自身のワーキンググループのチームの2チームに参加した。事務局からの連絡事項や各種情報は、COIL PROJECT 2022 のチームサイトに掲載した。

同期型のミーティングには、zoomを使用した。zoom meeting 内で、内容理解の補助として、一部 Microsoft Translator と OBS（Open Broadcaster Software）を組み合わせた映像を字幕のように表示した。多くの場合は、翻訳機能を利用せずに平易な英語を用いて進行していた。学生たちは、グループ活動をする時に、前述の Microsoft Translator に加えて、Google Translate、DeepL などのオンライン翻訳ツールを必要に応じて使用していた様子である。

また、Microsoft 社が提供するファイル共有・コラボレーションサービスの SharePoint を Teams と連携させて使用した。この SharePoint にプロジェクトの特設サイトを作成し、プロジェクト内で使用したスライドや動画などを共有した（図2）。同期型セッションの一部も録画し、このサイトで視聴できるようにした。非同期活動をする学生たちを支援するための各種情報もこの特設サイトに掲示した。「Recommended Tools」のコーナーでは、三大学の学生たちがグループ活動をする際に、便利でかつ全員が無料で使える著名な ICT ツールを紹介した（図3）。例えば、協働作業用として、Teams に加えてオンラインホワイトボード機能がある miro やメッセージングアプリの WhatsApp、タスク管理の Trello など、プレゼンテーション作成用に Canva や Visme、インフォグラフィックスの Piktochart、Video 編集機能として OpenShot、Shotcut などの提示した。各ツールのサイトにリンクを貼り、アイコンをクリックするとメインサイトに飛べるようにした。学生たちはここで提示されたツール以外にも、自分たちが慣れ親しんでいる SNS（LINE など）も活用していた。

同期型ミーティング	
非同期期間 2月24日～ ～3月11日	第一回 2月24日 (木)
	第二回 3月1日 (木)
	第三回 3月11日 (金)

図 1 スケジュール

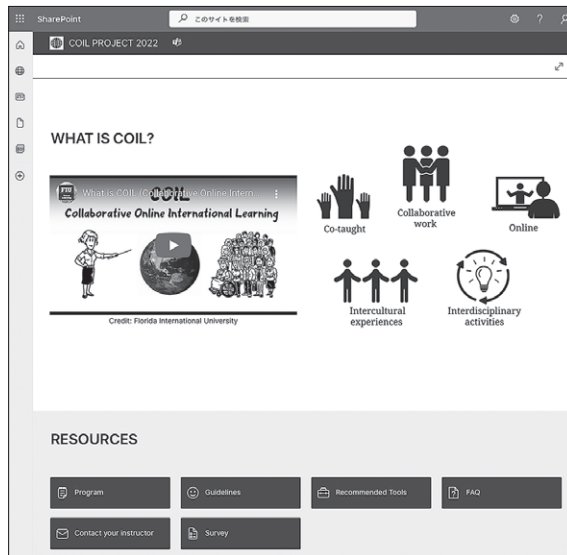


図 2 SharePoint に作成したプロジェクトの特設サイト

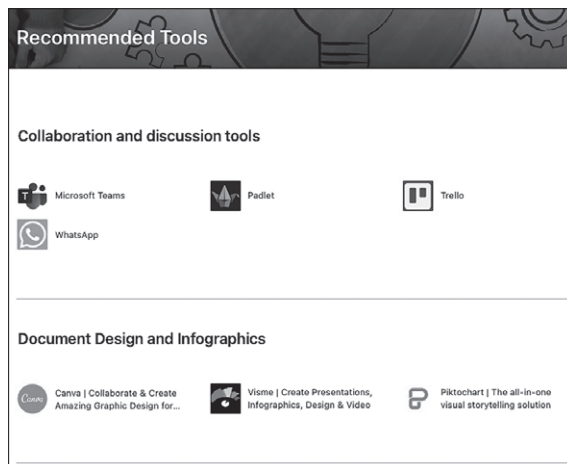


図 3 SharePoint 上の特設サイトで紹介したツール例

3.5. 非同期でのグループワークとそのテーマ

三大学からの其々1~2名で構成された計4~5名が集う5グループを設定した。原則として、非同期期間の活動は学生のみで実施し、同期セッションにおいても学生の主体的なやりとりを奨励した。一方、英語が第二言語であり、英語でのディスカッションに慣れていない学生もいることが想定された。そのため、学生間の円滑なコミュニケーションの実現を支援するファシリテーターとして、1~2名の教員が同期型セッションのグループワーク時にも参加した。

表1で示すように、各グループがポストコロナの大学教育について、様々な側面から考察するための協働をするように、別々のテーマを与えた。

3.6. 同期型セッションと非同期型活動の内容

同期型セッションは、zoom meetingにて3回実施した。学生も教職員も、大学や自宅などそれぞれの場所からzoom meetingに参加した。三大学の異なる学期や時間割、また時差の都合上、2回(サポートが1回)かつ2時間しか同期型で繋ぐことができないため、できるだけ早く学生たちの緊張を和らげ、安心できる関係性を構築することに努めた。全員が初対面であることから、事前にTeams内で、簡単な自己紹介文と写真1~2枚を投稿するように促した。同期型セッションでのコミュニケーション向上のため、可能な限りマスクを外す、1人1台のPCで参加し、カメラは常時オンにして自身の顔を見せる、アイスブレイクやチームワーク作業の時はミュートを基本的に解除しておく、ネチケット(ネット上のエチケット)を守ることなどをルールとした。また、基本的なネチケット(ネット上のエチケット)として、お互いを尊重し、順番に、ゆっくりはっきり話す、相手を傷つけるような発言は控える、などの心構えも再度伝えた。

表2で、同期型セッションの各回の活動内容と時間配分を示した。

第一回目は、2月24日に2時間のセッションとして開催した。プログラム内容は、前述したSharePoint上の特設サイトに事前に掲載した(図4)。全員が参加するzoom meetingのメインルーム(MR)にて、開会の挨拶の後、各大学の教員による大学紹介、今回のCOILプロジェクトについて説明した。次に、Pass the Word(お題に関する単語を言い、次の人を指す、という動作を次々続けていく)というアイスブレイク・アクティビティを実施し、休憩を挟んで、割り当てられたグループ毎にブレイクアウトルーム(BR)に分かれた。グループ毎にチームビルディング活動として、メンバーの自己紹介の後、グループ名を決め、グループメンバーの自己紹介スライドを作成した(写真1)。30分間のグループ活動の後、メインルームに戻り、全体でグループ発表を行った。グループ名は、Guava, 2gether Group, Cloud!, NINJA, Mononoke, とグループメンバーの趣味や個性が表現されており、自己紹介も多彩なものとなった(写真2)。その後、非同期期間となりグループがそれぞれに活動を継続した。

第二回目は、非同期期間のグループ活動を促進するため、非同期期間の中間の3月1日に、任意参加のQ&Aセッション(1時間)として実施した。学生の進捗状況を確認すると共に、学生が相談しやすい雰囲気を醸成するために、最初の10分でQuizizzというクイズアプリを用いた活動を全員で行った。担当教員がアプリ上で、グループワークの進捗状況や、直面している問題などについて質問をなげかけ、質問に対する参加者たちの答えが即座に画面上で共有された。続いて、メインルームでwarm-up activityをしてから(写真3)、グループ毎のブレイクアウトルームにわかれて、グループワークを行った。

表 1 グループ番号と各グループのプロジェクトトピック

Group	Project Topic
Group 1	Online versus on site? Academic aspects
Group 2	On campus versus from home? Student life aspects
Group 3	Global versus local? International aspects
Group 4	Theory/knowledge versus hands-on/experience? Methodological aspects
Group 5	Modern versus traditional? Equity, gender, religious aspects

表 2 同期型セッションの活動と時間配分

	活動内容	ルームと 時間配分
	<u>2022年2月24日</u>	合計 120分
	Greeting	MR : 2分
	Introduction of Universities	MR : 10分
	What is COIL? (本プロジェクトの説明)	MR : 18分
	Ice Break Activity	MR : 15分
	——— 休憩 ———	MR : 5分
第一回	Team Building Activity	BR : 30分
	①グループ名を決め、メンバー紹介のスライドを作成	
	②チーム毎のトピックの確認	
	③非同期期間の役割分担、スケジュール等を決める	
	Group Presentation	MR : 30分
	上記の①の活動方向 (グループ名とメンバー紹介)	
	<u>Q & A セッション (オプショナル) 2022年3月1日</u>	合計 60分
	Student Survey (学生たちのグループ活動の現状把握)	MR : 10分
第二回	Warm-up Activity	MR : 15分
	Group work	BR : 残り
	次回の発表に向けて準備	
	<u>2022年3月11日</u>	全 120分
	Warm-up Activity	MR : 14分
	Final Preparation (発表に向けての最終準備)	BR : 20分
第三回	Group Presentation	MR : 50分
	各グループ 10分 (質疑応答も含む)	
	Q&A and Reflection	MR : 15分
	Group Photo & Closing	MR : 5分

(注) MR : メインルームでの全体での活動

BR : ブレイクアウトルームでのグループワーク

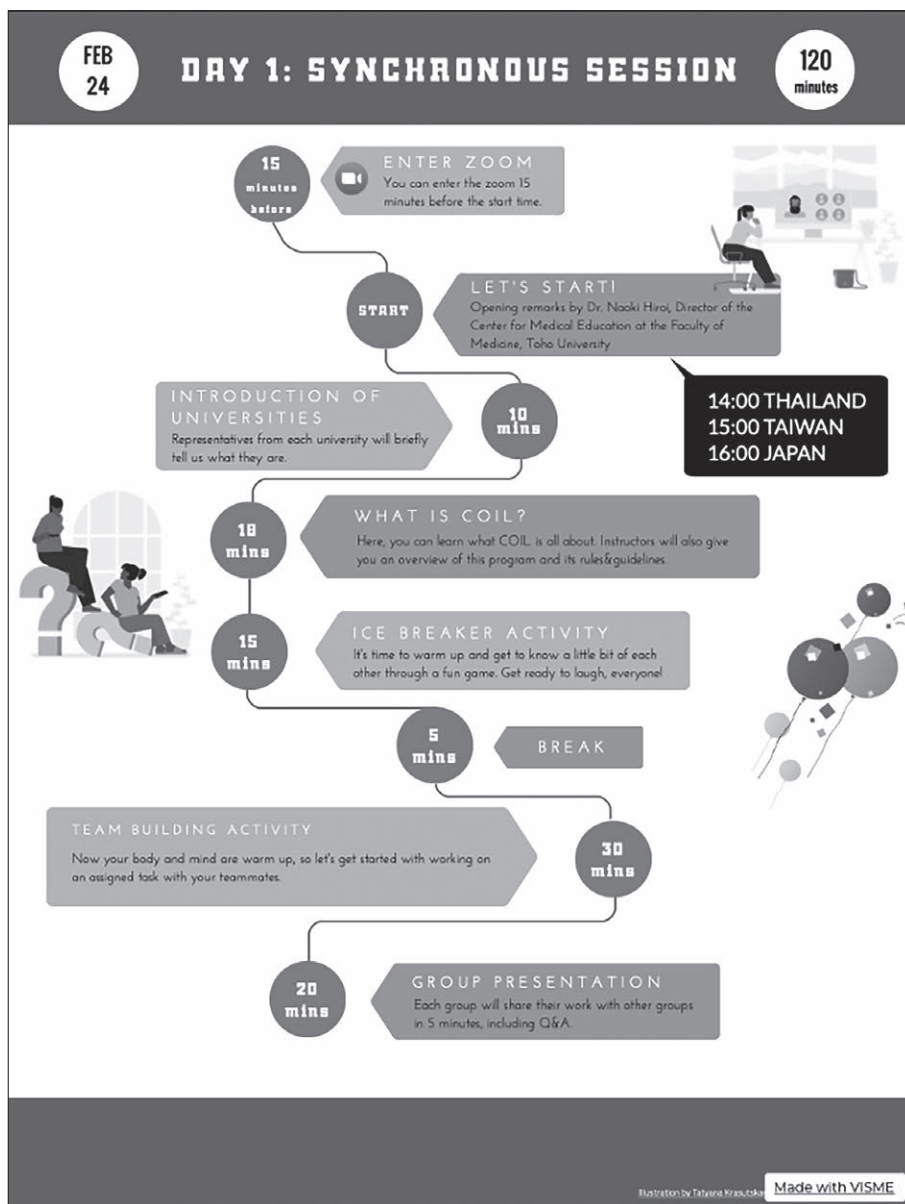


図 4 第一回のプログラム

第三回目は、3月11日にまとめのセッションとして2時間実施した。すでにグループのメンバー間では信頼関係が築けている様子が見られたが、全体発表に向けて、全体での信頼感を醸成するため全員で warm-up activity を行った。その後、20分間各ブレイクアウトルームで、グループ発表に向けてのリハーサル等の準備をした。各グループは初日に与えられた課題について10分間で発表し、質疑応答を行った。最後のリフレクションの際に、アンケートアップ



写真 1 ブレイクアウトルームでのグループの様子



写真 2 第一回各グループの紹介スライド



Pancakes or Waffles

Basically, you start with waffles vs. pancakes. The following person has to discard one of those for good and replace it with another topic/item/thing.

1. Person: "I choose pancakes and add cats, pancakes and cats"
2. Person: "I choose cats and add coffee, cats and coffee"
3. Person: "I choose cats and sunshine, cats and sunshine"

写真 3 Warm-up Activity を説明している様子

り Mentimeter を利用して、「今回の COIL プロジェクトから得たキーワードや考え」を表す 3 つの単語の記入を依頼した。アプリによる自動集計では、記入が最も多かったキーワードは「friendship」,「communication」,「pandemic」だった（写真 4）。最後にグループ写真を撮影し、閉会の挨拶で、全てのセッションが終了した（写真 5）。

3.7. 参加学生のアンケート結果

終了後、参加学生に今回のプログラムに関するアンケートを Google Form にて配布した。アンケート項目は、プロジェクトの満足度、テクノロジーの満足度、異文化（国際）交流経験の 3 領域について、5 件法含む複数選択肢からの単一回答による 6 問と、自由記述による 8 問の計 14 問である。匿名性に配慮したアンケートの研究利用に関する説明を行い、全プログラム参加の 22 名中 12 名（全参加者の 55%）が回答した。次に紹介する回答は、英語のコメントを筆者が抄訳したものである。



写真 4 リフレクションの様子



写真 5 第三回セッションでのグループ写真

プロジェクトの満足度について、質問3【プロジェクトで取り組んだ課題の魅力の程度（5件法, 1. Not really～5. A lot)】で最も多かったのが5点の「多かった」(5名)で平均は4.2だった。質問4【プロジェクトで最も有益な学びを得たこと・とき】は、「他国の学生とディスカッションしている時」「他国の学生と其々の文化について話した時」「他国の学生とありとあらゆる方法と駆使してコミュニケーションすること」など、プロジェクトの目的を実体験したとみられる記述が複数あった。質問5【英語でのコミュニケーションはどうだったか（5つの選択肢から単一回答)】は、「簡単に全く問題なかった」2名、「翻訳機能などの利用によって、コミュニケーションはうまくいった」3名、「自分の英語力が不十分だった」4名、「チームのメンバーの英語力が不十分だった」が1名だった。「チームの全員にとって難しかった」を選択した者はいなかった。質問6【COILプロジェクトを成功させるのに何が必要か】については、「協力」「助け合い」「友情」「アクティブな態度」「よいコミュニケーション」などがあげられた。また、「コミュニケーションのための様々な方法があるため、英語力の不足は問題ではない。それよりも、アクティブな態度が重要」との記述もあった。

テクノロジーに関して、質問7【グループワークをする時に最も利用したコミュニケーション・プラットフォーム】として書かれたのは、Microsoft Teams, LINE, Google Meetであり、質問9【今後のプロジェクトにおすすめのプラットフォーム】の回答も同様であった。質問8【それは目的を果たしたか（5件法, 1. Not at all～5. Perfectly)】で最も多かったのは5点（6名）で、平均は4.3点だった。質問10【使用したテクノロジーに問題はあったか】については、12名中11名が「なし」と答え、1名が、同じグループメンバーのネットワーク環境が不安定なため音声が届きづらかったことを報告した。

異文化（国際）交流についての質問に対する回答は次の通りである。質問11【プロジェクトの開始時、進行中、終了時のあなたの感情を表現する単語】では、プロジェクト開始時の感情としては8名が「Excited/Exciting」と書いた一方、3名が「Nervous」と記述した。プロジェクト進行中を表現する単語として「happy」「fun」「motivated」「comfortable」と楽しんでいた様子を表す単語が並び、終了時の感情の表現として、複数名が「satisfied」「inspired」などの単語をあげ、さらに「want more」「don't want to say good-bye」のように更に活動を継続したいという記述もあった。質問12【プロジェクトを通してあなた自身とグループの仲間について学んだことは何か】については、「それぞれの国の文化や伝統について学べた」「国際交流の楽しさを知った」など国際交流の重要性を学ぶと共に、「チームスピリット高めるためには、一緒に笑いあうことが大事」「タイムマネジメント」「プレゼンテーション力」など多様なメンバーと協働するプロジェクトワーク・スキルも習得した様子がうかがえた。そして、質問14【今回協働した学生たちと今後も連絡をとりあうと思うか】に対して、「はい」を選択した学生が12名中8名、「たぶん、他の人たちもそうなら」が4名で、「そう思わない」は0名だった。

プロジェクト全体に対する学生の評価を知るための質問もあった。質問15【同様のプロジェクトにもっと参加したいか】は、「参加したい」が12名中9名、「おそらく参加する」が3名、「参加しない」は0名だった。質問16【COILプログラムを友人に勧めますか】に対しては、全員が「勧める」と回答した。その理由として、他国の友人ができること、多様な価値観を知ることができること、英語でのコミュニケーションの練習になること、などが記述された。最後の質問17【このCOILプロジェクトで得た、今後のあなたの学びや人生で役立つようなことは何か】については、前述の第三回のリフレクション時のMentimeter集計と同様に、「コミュ

ニケーション」が最も多く、「異なる文化に対する理解」「友達を積極的につくること」といった多様な人たちの交流もあげられた。また「失敗を恐れずにとりくむこと」「興味があることには一歩踏み出してトライしてみること」「チームワーク」「タイムマネジメント」といったリーダーシップにつながる回答もあった。

アンケートの中に、「母国語が英語でない学生同士の交流は貴重だ」「英語が得意でなくても、様々なツールを使えばコミュニケーションができることを知った」「英語の発音が悪くても、間違えても、話す勇気をもつことを学んだ」などのコメントもあった。これらから本プロジェクトの特徴でもある、英語が第一言語でない学生同士の学びの意義が示唆された。

4. まとめ

4.1. 本パイロットプロジェクトの成果と課題

本パイロットプロジェクトにより、東邦大学 COIL ワーキンググループが設定した当初の目的である、オンラインによる国際交流や、海外の学生と共同して作業し発表する場の提供、COIL 型教育の実践例の提供を達成できた。また学生たちが、他の国の学生たちと直接コミュニケーションすることで、多様性のあるコミュニケーションとリーダーシップのとり方を学べたことも、学生のアンケート結果から確認できた。

グループに課されたプロジェクトトピックについては、学生たちのディスカッションの様子や最終回でのプレゼンテーション内容から、学生たちが自身の大学での学びや生活に関連づけて考えやすく、また議論を発展しやすい、適切な内容であったことが確認できた。さらに、プロジェクトで紹介した様々な ICT ツールを駆使することで、高度な語学力がなくても他国の学生とコミュニケーションできる経験を得、これからの時代の学びに活用できるスキルも獲得できたことがうかがわれる。

一方で、学生たちのアンケート結果や、プログラム終了後の本プロジェクトに関わった三大学の担当者による振り返りの会議録から、本プロジェクトでの課題や改善点もみえてきた。

まず、各大学において学生のリクルーティングに苦慮した。今回は、急な試みであったため、日程や内容が決定できたのが11月であり、2月開始のプログラムに対して12月に募集、と極めて短期間で募集になった。さらに、科目ではなく有志参加であり、学生たちにとって春休み中や新学期開始直後など参加しづらい日程となったため、学生の応募に対するモチベーションを高めづらかった。その結果、30名の定員を満たすことができなかった。今後は、学生がより参加しやすい時期を設定し、できるだけ科目と連動させ、年度の早い時期に募集をした方がよいだろう。

またグループワークの際、中山医学大学の学生たちがリーダーシップをとる様子がみられた一方、消極的な態度のままの学生が一定数存在した。中山医学大学からの学生は各グループに2名ずつ入り、事前に関係性を構築していたことが確認された。同じ大学のパートナーがいることで、より自信と安心感をもってグループ活動に参加できたことがうかがえる。1, 2年生という低学年の場合、各グループに同じ大学の学生（同じ母国語）がペアで参加する方が、各大学からひとりずつより効果的なディスカッションができる可能性がある。これについては、今後の同様のプログラムにおけるグループ分けで、検証していきたい。

本プロジェクトでは、学生アンケートや担当教員たちによる振り返りを行なったが、十分な効果測定はできていない。COILの効果測定としては、心理的な変容を測定するものとし

て BEVI (Beliefs, Events, and Values Inventory)⁹⁾ や、JAOS 留学アセスメント¹⁰⁾ などがある。BEVI は、1900 年代初頭の米国で、心理測定学の基準及び手続きに基づいて開発されたテストで、日本では広島大学で日本語版を作成し、留学プログラム (受け入れ・派遣) の効果測定と評価のために使用され、他校の利用も始まっている (バイサウス, 池田, 2020; 畝田谷, 2022; 西谷, 2018, 2020)¹¹⁻¹³⁾。JAOS 留学アセスメントは、海外留学協議会 (JAOS) が行動特性研究所と提携して開発した心理テストで、グローバルな環境で必要とされるコミュニケーション力、問題解決力、グローバルな環境で活躍する姿勢 (グローバルマインド)、グローバルな場で求められる行動 (グローバルビヘイビア) という 4 つのグローバル力のコンピテンシーを測定するものであり、活用例も報告されている (新見, 阿部, 星, 2019)¹⁴⁾。今後は、効果測定も視野にいれて COIL 型の教育を計画すべきであろう。

4.2. 今後の取り組み

2021 年度の本パイロットプロジェクトである、三大学による COIL 型交流プログラムは、2022 年度からグローバル化推進センターが主導し COIL 及び SDGs キャンプと発展して、実施する予定である。共同開催するのは、本プロジェクトの参加大学であったタイのソクラ王子大学と台湾の中山医学大学である。2022 年 11 月から 3 月まで COIL 型のプロジェクトを実施後、3 月に台湾において対面型の SDGs に関するプロジェクト型学習 (以下、SDGs グローバルキャンプ) をハイブリッドで行う。また、JAOS 留学アセスメントやルーブリックによる学生による学びの自己評価などを用いた効果測定も実施する計画である。さらに 2023 年度、対面型のキャンプを日本で実施することや、正規科目の一つとすることも計画されている。

本プロジェクトの試みから、COIL 型プログラムにより、学生たちに異文化コミュニケーション能力や協働スキルを身に付ける機会の提供が可能になること、さらに非同期期間も ICT ツールを活用しながらの活動により、学生の主体的な課題解決能力やデジタルコンピテンシーが高まることが確認された。COVID-19 収束に伴い、従来の海外留学や対面での国際交流の再開が進んでも、より多くの学生に国際的な経験や多様な学びの機会を提供するために、COIL 型プログラムは効果的な教育手法の一つとなるであろう。

謝 辞

本プロジェクトは、東邦大学学長である高松研先生の支援助と、東邦大学共通教育推進委員会の国際交流プロジェクトワーキンググループの尽力により実現した。高松研先生、このワーキンググループメンバーの廣井直樹先生、田中耕一郎先生、高橋瑞穂先生、Josef Messerklinger 先生、並びに共通教育推進委員会事務局の久保由紀子氏、白井結子氏、共同してプログラム計画・運営されたソクラ王子大学の IR オフィス担当の Anna Chatthong 先生、Tom Freimuth 先生、Sunisa Meesen 氏、中山医学大学の Kan-Jen Tsai 先生、Ya-Hsin Li 先生、Chao Yen Huang 先生に深謝する。そして協力教員として同期型セッションに参加した東邦大学の畑中敏伸先生、吉澤定子先生、佐々木大介先生、吉原彩先生、中田亜希子先生、プロジェクトに参加した学生の皆様、プロジェクト実施をご支援くださった共通教育推進委員会の教職員の皆様、また本プロジェクトのために各大学との調整や特設サイト作成など運営上の準備において尽力され、本稿執筆にあたっての資料等を提供いただいた東邦大学グローバル化推進センターの川野千佳氏、皆様に万謝する。

補足資料1 2021年度募集ポスター

学生各位

2021年12月23日
共通教育推進委員会

国際交流オンラインイベントのご案内

東邦大学と交流協定を締結しているソンクラ王子大学（タイ）と中山医学大学（台湾）と、ICTツールを活用しての共同学修イベントを下記のとおり実施します。

3大学の学生が5~6名の混成チームに分かれ、共通のテーマについてオンラインでチームワークを行います。まず、同期型（Zoom）でオリエンテーション等を行い、その後、メンバーごとでSNSや共有フォルダ等を使用して、課題に取り組みます（非同期型期間）。最終日には、同期型（Zoom）でチームごとに発表を行い、多様な考え方を共有します。非同期型期間の途中に、任意の参加のZoomでの中間報告等のミーティングを予定しています。

使用言語は英語ですが、英語力に自信が無くても問題ありません。翻訳ツールの紹介等、事前にサポートします。興味のある方は、ぜひお申し込みください。

テーマ:

COVID-19の経験から、大学教育の意義について考える

日程:

【オンライン同期型（Zoom）】

2022年2月24日（木）16:00-18:00 オリエンテーション等

2022年3月11日（金）16:00-18:00 発表

【オンライン Optional 2nd meeting（Zoom）】

2022年3月1日（火）16:00-18:00 中間報告等（希望者のみ参加）

【オンライン非同期型（SNSや共有フォルダ等の利用）】

2022年2月25日（金）～3月10日（木）チームごとに発表に向けて課題に取り組む期間

2月24日（木）
同期型1日目
顔合わせ・オリエン3月1日（火）
希望者のみ
中間報告等3月11日（金）
同期型2日目
発表等

2/25～3/10：非同期期間：ICTツールやSNSを利用し、発表準備



共催:

- Prince of Songkla University（ソンクラ王子大学）：タイ
- Chung Shan Medical University（中山医科大学）：台湾

募集人数:

各学部1年生2名（合計10名）※3大学合計30名の予定
※定員超過の場合は抽選。

申込フォーム: 以下 URL または右記 QR コードからお申し込みください。

<https://forms.gle/5ffDYB5vFfWkdKj5A>

申込期限: 2022年1月11日（火）



問合せ先：学事統括部

参考文献

- 1) 文部科学省 (2022). 高等教育を軸としたグローバル政策の方向性～コロナ禍で激減した学生交流の回復に向けて～. https://www.mext.go.jp/content/20220913-mxt_koutou03-000024166_1.pdf. (検索日 2022 年 12 月 20 日)
- 2) 全炳徳, Yuki Miyamoto. (2019). 日米大学間の COIL (GLE) 型授業の実践と課題. 長崎大学教育学部教育実践研究紀要, 18, 251-260.
- 3) 藤掛千絵, 山岸敬和. (2019). COIL という教育手法の導入—南山大学の新たな国際化に向けての取り組み—. 留学交流, 103, 1-6.
- 4) 池田佳子. (2015). アウトバウンド促進授業実践としての COIL (オンライン国際連携学習) (世界のピアと協働学習を通して生まれる外向き志向). グローバル人材育成教育研究, 2(2), 65-70.
- 5) Japan Virtual Campus (n.d.). JV-Campus とは. <https://www.jv-campus.org/providers/about/> (検索日 2022 年 12 月 20 日)
- 6) Rubin, John. (2017). Embedding Collaborative Online International Learning (COIL) at Higher Education Institutions—Evolutionary Overview with Exemplars. International Higher Education, 2, 27-33.
- 7) JPN-COIL 協議会 (n.d.). <https://www.kansai-u.ac.jp/Kokusai/IIGE/jp/JPN-COIL/>. (検索日 2022 年 12 月 20 日)
- 8) The SUNY COIL Center (n.d.) <https://coilsunysuny.edu> (検索日 2022 年 12 月 20 日)
- 9) BEVI (n.d.) <https://jp.thebevi.com> (検索日 2022 年 12 月 20 日)
- 10) JAOS 留学アセスメント (n.d.) <https://www.iobt.jp/behavior-traits/assessment-test.html> (検索日 2022 年 12 月 20 日)
- 11) 西谷元. (2018). 留学体験の客観的測定—BEVI を用いて—. 大学時報, 380, 74-79.
- 12) バイサウス・ドン, 池田佳子. (2020). 国際教育実践の学習効果測定の手法の一考察—COIL PLUS プログラムにおける BEVI の活用—. 関西大学高等教育研究, 11, 131-136.
- 13) 畝田谷桂子. (2022). オンライン国際交流教育によるグローバルコンピテンス育成の一考察—タイ王国プーラーバ大学とのオンライン国際協働学習の試み—. 鹿児島大学総合教育機構紀要, 5, 100-114.
- 14) 新見有紀子, 阿部仁, 星洋. (2019). 海外留学経験とグローバル人材育成—JAOS 留学アセスメントテストを用いた考察—. 一橋大学国際教育交流センター紀要, 1, 83-92.